

第8分科会 公開保育（かえで幼稚園）報告

幼稚園の公的役割の高まりとともに学校評価もより厳密な内容を求められています。公開保育を実施することで、評価者や参加者の外部の視点を導入することによって、自園の良さや課題を見つけていくことが第三者評価としての機能を果たすという、全日本私立幼稚園幼児教育研究機構の目標を受けて、公開保育に取り組みました。

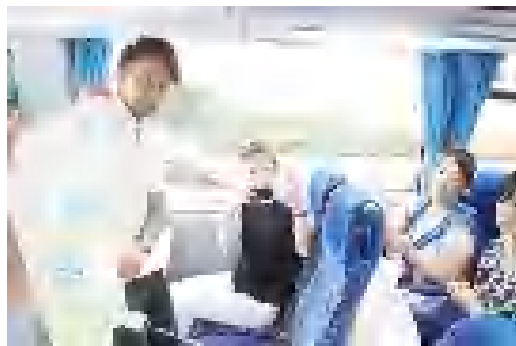
今回の公開保育を通して再認識したことがいろいろあります。今までの周到的な準備の上でおこなわれていたどちらかという余所行き公開保育と、実施する園が自分たちの保育について「これでいいのか？」といった事柄を「問い」として発することに手間暇掛ける普段着の公開保育とでは、公開保育の在り方自体がやはり違うなと感じました。その大きな違いは、子どもたち自身がどのような生活を幼稚園で紡ぎあげているかということに参加者の視点に移ったという点です。幼稚園教育要領の中核をなす子どもたち一人ひとりの主体性を大切にするという保育は、保育形態を問わずどの幼稚園にとっても大きな課題です。子どもの主体性を大切にすることは子どもたちの日々の様子をしっかり観察し、子どもたちとともに展開できる保育を作り上げていかなければなりません。保育者は日々そのために子どもたちを見守り、ときには子どもたちに願いを伝えます。公開保育においても、子どもたちを中心に視線が注がれた上で、子どもに対する環境作りや子どもに対する保育者の援助などがグループワークによって討議されるということは、保育の本質に迫る学びだと思えます。特別なことをおこなうのではなく日々の保育をありのままに公開することが、大きな学びにつながります。あるがままの幼稚園の中で保育者が視線を送るのはあるがままの子どもたちなのです。



今回、公開保育を実施したかえで幼稚園が郊外に位置するという点で時間に追われる公開保育ではありましたが、往復のバスも乗車時間を最大限活用しました。行きのバスでは園の概要から、今回の公開保育・グループワークの内容まで参加者にレクチャーすることができました。帰りのバスでは各グループワークの内容発表がおこなわれ、解散場所のホテルに着くまで、とても実りの

ある発表や質疑応答がおこなわれました。その発表で見えてきたものは、ともに育ちあう子どもたちの姿でした。子どもたちの中から引き出されているものを参加者が感じ取り、たとえ保育形態が違う園だとしても今回の討議内容が活かしていける内容だったと思います。自由保育、設定保育という保育形態が対極にあるもののように言われてきましたが、子どもたちの育ちを見つめ、子どもたちの中から自らの育ちを引き出していくという点では決して対極にあるものではありません。どの園も基本的にその両方の要素を兼ね備えており、保育の中心には常に子どもがいるのだということを帰りのバスの発表を通して実感することができました。

公開保育実施園にとっても、外部からの視点はとても刺激になったようです。自分たちが気になっている部分に対して他の幼稚園の保育者がどう考えるのか？そのことを知ることによって自分たちのあるべき姿を再認識することができたのではないかと思います。多くの園がそれぞれの園で作り上げた園文化を持っています。歴代の子どもたちが作り上げてきた園文化を元にしながら、新しい個性を積み上げて子どもたちは園文化を育てていきます。そのことの大切さを実感できた発表でした。



バスの定員の関係で参加者を50名限定にせざるを得ませんでした。各グループワークの参加人数を4~5名にすることができ、全員に発言の機会を作ることができました。また、各県の公開保育コーディネーターにグループワークにかかわっていただいたことで、議論の方向性が定まり、この公開保育の趣旨が活きたように思います。もちろん完璧というわけではありません。今回のような形の公開保育が広まっていく中で、問題点の検証・考察がおこなわれ、より多くの学びが得られるグループワークがおこなわれるようになっていくことを望みます。これからもこの第三者評価へつなげる公開保育に期待したいと思います。

報告者(公財)広島県私立幼稚園連盟保育研究委員 橋本真(谷の百合幼稚園)